

一方、北上川上流～中流域の遺跡から出土する海水生魚類の骨はマダイやマグロ属の一種・サメの歯など食料以外に垂飾品などとして二次的な目的に利用されるものに限られてくるのは食料として搬入できる距離の限界点を意味している（註3）。

北上川流域から奥羽山地側の山間部の河川上流に位置する遺跡では、採集や狩猟活動に比重を置きながら、近くの溪流でイワナやヤマメ・ウグイなどの捕獲を行ったものと考えられる。また狩猟活動は広範囲で行われることから、食料を求めて中規模河川や湖沼へも積極的に出向き漁撈活動や交易を行っていた可能性も考えられる。（溜）

註1 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚II』の北上川下流域における海岸線変遷想定図において縄文時代後期末～晩期初頭の鹹水域の北限を桃生郡桃生町深山遺跡を北限とし、汽水域を旧北上川と北上川の合流地点と想定している。

註2 『那珂川流域の漁網錘』の記述のなかで上野修一氏は有溝土錘が砂泥底の漁場で使用された可能性について述べている。

註3 秋田県大館市の『池内遺跡』では沿岸部から約50kmあるにもかかわらずカツオ、サバ、ホシザメなど数種類の海水性魚類の遺存体が出土し、当時の加工・保存技術や搬入経路（交流）を考える上で貴重な遺跡である。

#### 〈引用・参考文献〉

草間俊一・金子浩昌 1971 『貝鳥貝塚発掘調査報告書』：花泉町教育委員会

東北大学文学部考古学研究所 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚II』：東北大学文学部考古学研究所

東北大学文学部考古学研究所 1997 『中神遺跡の調査』：花泉町教育委員会

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1982 『蘿内遺跡発掘調査報告書』：岩文振第32集

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1993 『新山権現社遺跡発掘調査報告書』：岩文振第188集

（財）岩手県埋蔵文化財センター 2000 『長倉I 遺跡発掘調査報告書』：岩文振第336集

（財）岩手県埋蔵文化財センター 1998 『大日向II 遺跡発掘調査報告書 第5次～第8次調査』：岩文振第273集

（財）岩手県埋蔵文化財センター 2000 『相ノ沢遺跡発掘調査報告書』：岩文振第332集

## 5 岩手県における黒曜石産地の問題点

石器時代である縄文時代において、黒曜石はごく一般的な石製利器の素材であるが、県内の縄文遺跡から出土する黒曜石製石器は、石器群全体に占める比率は意外なほど低い。たとえば北上市大橋遺跡では大テンバコで700箱近い遺物が出土し、剥片石器も推定5万点以上回収されたが、黒曜石製石器の出土数はわずか38点である。また、県央の盛岡市手代森遺跡・熊堂A遺跡、県北の軽米町長倉I遺跡や沿岸北部の拠点的集落である普代村力持遺跡でも大量の遺物が回収されているが、黒曜石の出土数は全く無いか出土してもごくわずかである。これに対し、磐井郡の北上川沿いの遺跡では石鏃製作に特化した黒曜石利用がなされている。本遺跡もそのひとつであるが、小テンバコ2箱分の2168点、総重量3651.79gが出土している。また、本遺跡から出土した1302点の石鏃のうち3割以上を黒曜石製が占める。さらに、周辺では一関市清水遺跡（縄文中期末～後期：石鏃約2500点）、藤沢町相ノ沢遺跡（縄文後期～晩期：石鏃約8000点）、花泉町下館銅屋遺跡（縄文中期～後期初頭：石鏃4449点）などが質・量ともにまとまり、これらの遺跡でも、本遺跡と同様に石鏃・剥片・碎片・石核などの石鏃製作に関連する黒曜石製石器が大量に出土している。

現在、岩手県内では黒曜石産地が複数確認されているが、理化学分析による報告事例が多いのは零

石町小赤沢、水沢市折居、花泉町金沢の3カ所である。この3カ所で採取された黒曜石は蛍光X線分析を主とする理化学分析によっても明確に分離できないため、北上川の流路に沿って形成された折居と金沢は、小赤沢の露頭付近から運ばれた小礫サイズの黒曜石原石が堆積する、いわゆる二次原産地と考えられている。県下の遺跡出土黒曜石の分析では、これまで3者のうちで遺跡から近距離に位置する産地名称や「零石産」・「折居産」・「花泉産」の3者の代表名として「零石系産地」と報告される（藁科1999・2000等）ことが多かった。しかしながら、現実に遺跡から出土する黒曜石は、県南の磐井郡に著しい偏りをみせ、産地「零石」に近づくにつれ、むしろその出土数は減少する。もし、仮に縄文時代に産地「零石」が開発されていたならば、石材供給量と産地からの距離の関係を示したレンフリューの減少曲線（Renfrew1982）にしたがうと、黒曜石は零石周辺遺跡で多量に出土し、産地から距離が離れるにつれて出土量の減少傾向が窺えるはずであるが、現実は逆である。

現在でも「零石産」は石器製作に適した径10cm程度のサイズがごく狭いエリアで採取可能であるが、零石周辺の縄文遺跡から出土した10cm程度のサイズを保持した「零石系」黒曜石製石器は皆無である。一方、磐井郡の遺跡から出土する黒曜石原石はほとんどすべて円磨礫で構成され、そのサイズは3～5cmを主体とする。石器サイズは元の原石サイズに規制を受けるため、3cm程度の小型石器が製作されることとなる。このことは「零石系」が「零石産」ではなく、県南の「花泉産」に限られる可能性を示唆している。

では「折居産」はどうであろうか。「折居産」については不明な点が多く、遺跡出土黒曜石の折居周辺の遺跡では多量の晩期資料が出土した前沢町川岸場Ⅱ遺跡がある。100点を越える黒曜石が出土しているが、原産地周辺遺跡としては少なすぎる。むしろ磐井郡方面から搬入された程度の黒曜石量であり、折居についても縄文人に産地として認識されていたかは判断しがたい。

結論すれば、黒曜石出土遺跡の分布と石器サイズの検討から、岩手県内の「零石系」とされる黒曜石産地は磐井郡内の北上川周辺に位置し、花泉町金沢・払田地区に二次原産地として黒曜石円磨礫の集積地となっているのではないだろうか。また、現在とは異なり、「零石産」は縄文人には広く認知されていなかったと考えられる。磐井郡内の北上川沿いに二次原産地が多数形成されている可能性を考慮するならば、今後、県内遺跡出土黒曜石の理化学分析で「零石系」と判定されても、考古学的には磐井郡方面からの供給の可能性を強く意識し、「花泉産」流通という視点から黒曜石の検討を行う必要がある。

（米田）

## 参考文献

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』第297集  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第317集  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『相ノ沢遺跡発掘調査報告書』第332集  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』第382集  
 藤井哲男 1999 「下館銅屋遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 藤井哲男 2000 「岩手県相ノ沢遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析」『相ノ沢遺跡発掘調査報告書』  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 Renfrew, C. 1982. Explanation revisited. In Theory and Explanation in archaeology, ed. New York, Academic Press